

水がいのときからかぞえて、もう三年ちかくもなかった。今では、あの水がいのおそろしかったことなど、だれも口にもださないくらいになって来た。でも今、あのおそろしかったことを思うと、わたくしは、じぶんまで、大水にながされていくような気がしてたまらない。

小さいころなんかは、水というものは、人間のやくだつことをするものだと思っていた。それなのに、人間をふじゆうなめに合わせた。水もいいことと悪いことをするということが、このときからわかった。

今では、水がいのときだめになった川も、きれいになおしている。

けれども、おとうさんやおかあさんは、もうこのよの中には、うまれてこない。遠い天国で、わたしたちが、大きくなってりっぱな人になることをいっついてくれるのだろう。そして、おとうさん、おかあさんたちは、わたしたちをなぐさめてくださる、国じゅうのみなさんに、おれいをいっっているだろう。わたしは、大きくなって、わたしたちをなぐさめてくださる、みなさんのやさしい心は、ぜったいにわすれないよう、心のそこにたいせつにとっておきたい。

おばあさんも、ときどき、

「だれか一人いきていくれりやあなあ。」

とためいきをついていう。おばあさんも、三年前のかなしみが、心のそこまで、しみとおっているのだ。

おにいさんは、もうかなしいこともなれたといっってもいいくらいだ。おばあさんにいいつけられたしごとでも、かんたんそうにしている。わたしが、今、つらいのは、しごとだ。でもおばあさんは、小さいころつらいことをしていると、大きくなってからは、つらいことにあわないといっってくれた。

わたしは、大きくなってから、どんなことにもくじけない、えらい人になりたいと思う。  
(三十八年)

〔注〕 下伊那郡高森町のG・Tさん(当時<sup>三七</sup>) Sさん(三<sup>二</sup>)夫妻は、災害のさい水防作業に出かけ、すさまじい鉄砲水の勢いに流されて亡くなった。後には、長男のM君(九<sup>つ</sup>)長女Mちゃん(七<sup>つ</sup>)末っ子のHちゃん(四<sup>つ</sup>)の三人兄妹と祖母のMさん(六<sup>一</sup>)が残され、大黒柱を失った一家は、その翌日から生活の道を絶たれてしまった。

この一家の窮状をみかねたGさんの小学校時代のクラスメートたちは親がわりとなつて遺児の将来を守つてあげようと同窓生に呼びかけた。そして、この三人の遺児たちをせめて中学校までは通学させ、立派な社会人に育て上げるために、育英資金を作ることになり、クラスメート皆が募金活動を進めている。

(ニッポン放送)